



学院だより

平成27年

2015

5

～天野正子先生を偲んで～



発行 学校法人 東京家政学院
〒102-8341 東京都千代田区三番町22番地
Tel. 03-3262-2251 (代表) Fax. 03-3262-2174



町田キャンパス
〒194-0292 東京都町田市相原町 2600 番地
TEL : 042-782-9811 (代)

千代田三番町キャンパス
〒102-8341 東京都千代田区三番町 22 番地
TEL : 03-3262-2257 (代)

URL <http://www.kasei-gakuin.ac.jp/>

計 報

天野正子先生が平成27年5月1日東京都杉並区の病院で亡くなりました。享年78歳でした。天野正子先生は、平成21年4月東京家政学院大学・同短期大学の学長に就任し、学生たちを心から愛され、現代生活者の学(現代生活学)を掲げ、学生・教職員・関係者が一体化した大学改革(KVAルネサンス)を推進されました。多くの教職員の強い希望があって、4年間の任期満了後再任され、平成27年3月まで学院の発展に大きく寄与されました。本学へのご貢献に心から感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

業 績

昭和13年3月に広島市に生まれ、お茶の水女子大学文教育学部教育社会学専攻を卒業し、大学の教員としては、南山短期大学、金城学院大学、千葉大学を経て、平成7年4月から、母校であるお茶の水女子大学教授。その後東京女子大学では、学長及び理事として女子高等教育に貢献された。お茶の水女子大学 名誉教授。

男女共同参画社会を目指し、社会学、ジェンダー社会学、歴史社会学の分野において、女子高等教育の振興と生活者育成に大きく貢献した日本の女性学の草分け的存在である。『現代生活学』を持続可能な生活を創造する学として定義し、理論と教育実践を結び、総合科学としての現代生活学の礎を築いた生活者論のバイオニアである。

研究では『「生活者」とはだれか、自律的市民の系譜』(中央公論社)や『フェミニズムのイゾムを超えて、女たちの時代経験』(岩波書店)等、生活の協同、女性の職業、特にワーカーズ・コレクティブの可能性等の論考は市民活動のマイルストーンと言われ、男女共同参画社会における

女性のライフスタイルの理論と政策形成に寄与した功績は大きい。

また、「生活者」という言葉が、日本独自のものであることに注目し英訳した『In Pursuit of the Seikatsusha: A Genealogy of the Autonomous Citizen in Japan (Melbourne: Trans Pacific Press)』を2011年世界に向けて出版したことは特筆される。さらに、研究の集大成として『現代「生活者」論』(つながりを育てる社会へ)、『有志舎』や『(老いがい)の時代』(日本映画を読む) (岩波新書)の著作を社会に発信した。

学識と人望から、各種学会・公益法人等でも多彩な活躍を行った。日本教育社会学会理事及び評議員、同学会編集委員長、日本社会学会理事及び監事、社会調査士資格認定機構理事、日本学術会議連携会員、日本学術振興会特別研究委員等審査会委員、(財)生協総合研究所理事、(社)社会調査協会副理事長及び顧問、国立女性教育会館運営委員長、日本ユネスコ国内委員会委員の各種審議会等委員を歴任した。

東京家政学院大学 学生・卒業生・教職員の皆さまへ

天野先生は平成27年3月19日大学卒業式に病をおして出席され告辞を述べられました。

卒業式後、東京家政学院大学の学生・卒業生・教職員の皆さまへメッセージを託されましたのでお届けします。

《東京家政学院大学の皆さまへのメッセージ》

大学教員生活最後の6年間で、皆さまに出会えた「幸せ」を、かみしめております。とても楽しい時間でした。私にその幸せを運んでくれた学び舎としての東京家政学院大学の存続と発展を切に祈念しております。



《3月19日 卒業式告辞より》

待ちわびた春の訪れのなかで、今日の卒業式を迎えられるみなさん、おめでとうございます。学生から社会人へ―その節目である「新しい門出」を心からお祝い致します。

今日この日まで、長きにわたり、お子様の成長を支えてこられたご家族の皆様にも、お喜びを申し上げます。これまでのご苦労に敬意を表しますとともに、本学に対する温かいご支援に深く感謝致します。ご列席の来賓の方々、そしてすべての教職員や在学生とともに、みなさんの希望に満ちたこの日を、晴れやかな気持ちでお祝いしたいと思います。

今日の卒業式には496名の現代生活学部卒業生、2名の家政学部卒業生、6名の大学院修士が参列されていますが、家政学部は半世紀以上にわたる、日本の女子高等教育史に重要な足跡を刻んで、今日を最後に、幕を閉じることになり、

最後の卒業生になります。青春の大切な時期仲間と共に歩んだ学部が姿を消すことに、心のうちに複雑で不安な気持ちをもたれたと思います。みなさん一人ひとりの「これからは」今度は「現代生活学部」が責任をもって応援していきます。就職や進路で迷ったり、つまずきや挫折で悩むことがあるかもしれません。その時はいつでも帰ってきてください。「カム・バック・アゲイン」を心から歓迎をいたします。

さて、卒業式とは、大学での四年間をふりかえる機会であるとともに、新たな旅立ちへの希望と自覚を、胸に刻む貴重な機会です。

みなさんが入学した2011年の入学式のことを覚えていますか？私は千代田三番町のローズホールの壇上から新入生のみなさんに、こんなふうに話しかけたように思います。

「本学は入学時の学力偏差値よりも、みなさん一人ひとりの成長にていねいに目をむけ、四年間で隠れた可能性や能力をどれだけ掘り起し引き出すことができるかという、卒業成長値を重視して、それを教育の中心にしたいと願っています。どうぞ、みなさん、なによりも「自分は何をしてもらったのだ」という「思い込み」をすててください。思い込みを捨てた瞬間、大切なことが見えてきます。みなさんの四年後が楽しみですよ」と。

いま、卒業の時を迎え、みなさんの一人ひとり、自分のなかで何かが変わったという実感はどうでしょうか。人間として成長したという手ごたえは十分でしょうか。それとも反省や後悔が残っているのでしょうか。それはみなさん一人ひとり、それぞれに異なっていることでしょう。しかし、どのような答えであっても、それぞれが皆さんにとって4年間かけて手にした大切な思い出です。どうか、今の思いを心に刻んで、新たな人生の出发点として下さい。

実はみなさん一人ひとりが変わったということに、私は少しも疑いをもっていないません。この四年間、みなさんが一人ひとり、自分の力が求められている機会と場に出くわすとき、予想以上の力を発揮される場面にはしばしば出会いました。地域に開かれた大学として、本学が重視している地域連携活動一つをとっても、そうです。地元の農家や企業との産学共同プロジェクト、子ども体験塾や高齢者のケアプランの作成、住民と楽しむフアッションショーへの企画や裏方の仕事まで、みなさんの発揮される実践力に、「やるじゃない！」とくりかえし驚かされたものです。

ある学生は「はじめは不安で失敗ばかり。でも、そんな時、失敗したらやりなせよ。やり直すのも能力のひとつという先生の声に励みになった。それ以上に自分が地域の暮らしの“未来”に関わっているという手ごたえが私の支えとなった」と話してくれました。別の学生は、「地域のいろんなタイプの人ときあうなかで、これまで社交的でないで悩んでいた自分が、実は八方美人ではないこと、人に対しての誠実さの証しかもしれないと思うようになり、考え方が変わった」と語ってくれました。人との関係でうまくいかない原因だと考えてきたものが、実は「自分の強み」、自分の「力」だと気づくようになったというのです。学生のこうした感想から見えてくる大切なのは、ものごとを一面的にみないで、多面的、長期的にとらえる、つまり考え方を考えることとであり、考え方を換えれば行動の仕方も違ってくるということなのです。

キャンパス内外のこうした活動を通じてみなさんが、KVAスピリットの重視する、社会に通用する専門性や企画力、協働する力や実践力など、さまざまな内なる能力を引き出し、自己成長を遂げられたことと確信しています。

そして、みなさんが手に入れた卒業成長値は、予想困難な時代を生き抜く「底力」として、卒業「後」の成長値につながっていくに違いないことを私は確信しています。十年後のみなさんがどのような社会人に成長をとげるのか、とても楽しみます。

大学生としてのみなさんに、正式な形でお会いするのはこれが最後の機会になることと思いません。お伝えしたいことはあふれるほどありますが、そのうちひとつだけに絞ってお伝えし、私の「贈る言葉」にしたいと思います。

それは社会人になるとはどういうことなのか、あらためて自覚してほしいということです。被災地の光景に誰もが言葉を失った東日本大震災から早や4年たちました。「被災地を忘れない」の声も薄れるなか、いろいろな検証をみると、除染を含めて復興は進んでいないことが分かります。それだけ傷跡が深いのです。県外に避難されている福島の方々は約23万人。いまだ帰ることのできないふるさとの現状が浮き彫りになっています。住まいを失った人々の暮らす復興住宅では、二人に一人が65歳と高齢化が進み、昨年一年間で孤独死は40件にのぼったということです。

目を地球の向こう側にむければ、さらに厳しい現実が見えてきます。皆さんは2014年のノーベル平和賞が、女性や子供たちの教育を受ける権利を主張してきたバキスタン出身の17歳の学生、マララ・ユスフザイさんに送られたことをご存じでしょう。マララさんは武装勢力に銃撃されて重傷を負いましたが、奇跡的に命をとりとめ、国連で、「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、一本のペン、そしてなによりも平和が世界を変えるのです」と訴えました。私は、マララさんが、自分の命を顧みることなく、自身の主張を貫く姿に深い感銘を受けました。同時に、教育に関

わるものとして、マララさんとその背後にある現実を正確に認識していなかったことが恥ずかしくなりました。ユネスコの推計によると、小学校に通えない子どもは5千7百万人以上、多くはアフリカやアジア地域で暮らしており、このうち女子が半分以上を占めるそうです。貧しいために働いて家族を助けたり、幼いうちに結婚させたりする風習があるからです。

こうした国内外の厳しい状況は確かに個人の力ではどうすることもできないかもしれせん。しかし、グローバルな観点から日本と世界の現実にしつかりと目を凝らしてみつめ、自分は何ができるかという「魂」をもちつづけることは出来るはずです。この地球上で偶然の生を分かち授けられたもの同士「共感」を抱くことができるはず

です。そうなのです。私からのメッセージの一つは、社会人になるというのは、これまで経済的にも精神的にも多くの人たちとのつながりに支えられてきたみなさんが、今度は、支える側になることを意味しているということです。仕事や、社会活動や、日常生活を通して、他の人びとの力になるうと努力することが、実は自分を支え、生きる力にもなるのだということ、これから、みなさんに見出していくことでしょう。見方を変えれば、それは、みなさんが苦境に陥った時、手をさしのべ、その背中を押してくれる誰かがきつと存在するということでもあります。そう信じて、一歩前に大きく力強く踏み出して下さい。

さいごに私はみなさんが入学する2年前に学長として本学に就任し、様々なイベントに参加してみなさんのおしゃべりを楽しむ機会をもつことができました。皆さんと共に、大学を去るいま、長い大学教員生活最後の4年間に皆さんに出会え

た「幸せ」を、かみしめております。

これから社会と人生の大海原へと航海に乗り出す皆さん一人ひとりに、かけがえのない未来が開かれることを期待して、「さようなら」に代えて、「では、またね、みなさん！」の言葉でお別れをしたいと思います。

平成27年3月19日

学長 天野正子

